

ボリビア・アマゾンの考古学
ロマ・チョコラタリトの発掘とモホス古代社会の
宗教と世界観について

The Archaeology of the Bolivian Amazon
An Excavation of the Loma Chokolatalito and the Religion
and World View of Ancient Mojos Society

実 松 克 義
SANEMATSU Katsuyoshi

実松克義
SANEMATSU Katsuyoshi

 **Key words:** アマゾン川、モホス古代文化、世界観、宗教、環境思想
the Amazon, ancient Mojos culture, world view, religion, environmental
thought

Abstract

This paper summarizes the results of the archaeological excavation which the author undertook at the Loma Chokolatalito, an ancient settlement in the Bolivian Amazon, focusing on its religion and world view. This excavation was realized for three years from 2006 until 2008 and was the core of the Project Mojos (Phase I) which is a Japan-Bolivia joint scientific project to investigate the ancient culture of the Llanos de Mojos of Bolivia. The excavation confirmed that this ancient place was inhabited for over 1,300 years beginning before Christ and achieved a considerably refined culture. The unearthed objects included, among other things, human skeletons, burial urns, ceremonial pots, ornaments, artifacts, tools and devices and musical instruments. An analysis of the findings of the archaeological excavation shed light on the understanding of ancient burial practice, pottery tradition, animal worship, religion, world view and environmental thought.

1. はじめに

この論文の目的は南米大陸、ボリビア多民族国北東部、モホス大平原に存在した古代文化についての筆者自身の調査研究の結果を、とりわけその宗教文化と世界観に重点をおいて要約し、考察することである。筆者は2005年～2009年の5年間、現地においてボリビアとの共同調査プロジェクトを実施した。本題に入る前に、はじめに、モホス古代文化の内容と特徴について概略を説明する。現代に残る古代文化の痕跡を概観し、その発見とこれまでの研究の歴史を略述する。その後、実施された調査プロジェクトの内容に触れ、その中心を成す、2006年～2008年に実施された古代の居住地ロマ・チョコラタリトの発掘調査について詳述したい。ロマ・チョコラタリトはモホス大平原中央部に位置する平均的な古代の居住地跡である。この古代居住地の発掘調査の概要と結果を述べた上で、モホス古代社会の民族、歴史、土器、埋葬、動物信仰、世界観、宗教、及び環境思想について個別に論じてゆきたい。そして最後に調査結果の要約を行い、結論を述べたいと思う。

2. ボリビア・アマゾン古代文化

アマゾン地域は長い間未開の処女地であると考えられてきたが、最近の調査研究の結果、それは見かけだけのことであることがわかっている¹⁾。アマゾンの各地域、アマゾン河口のマラジョ島、本流下流のサンタレム周辺、中流のマナウス地域、上流のエクアドル・アマゾン、ペルー・アマゾン、支流のシンゲー川上流域、ブラジル・アクレ州リオ・ブランコ近郊等に、かつて大規模な社会が存在していた。中でもボリビア・アマゾン、モホス大平原に存在した古代社会は、その規模においておそらくアマゾン最大のものであった。モホス大平原は、アマゾンの支流マデイラ川の上流域に存在する、総面積25万㎡にも及ぶ巨大な氾濫原である。氾濫原には三つの河川、ベニ川、マモレ川、グアポレーイテネス川が流れるが、これらの河川は定期的に氾濫し、そのため本格的な熱帯雨林は存在しない。植生の大半はサバンナと藪であり、また多くの沼沢地、湿地帯が存在する。古代人はここに複雑で巧妙な水利複合を建設し、アマゾンの自然環境を徹底して改変した。目的は高度な社会の成立を可能にする、居住環境の改善、交通網の整備、統治機構の確立、また優れた生産システムの創出であったと思われる。モホス大平原の全域に、ロマ、テラプレン、運河、人造湖、サークル、農耕地跡など、古代人が行った大土木工事の跡が残されている。

ロマは盛り土による低い人工のマウンドで、モホス古代人の居住地の跡である。大小様々なロマが存在するが、その数はモホス全域で2万個に達するとみられ、最大のものは面積100ヘクタールに及ぶ。テラプレンは真っ直ぐに走る土塁であるが、道路であると同時に堤防の機能を持っていたと考えられている。テラプレンはロマをあたかもネットワークのように結んでいるが、その総延長は5,000km～10,000kmに達するとみられている。テラプレンと同様にモホス全域に見

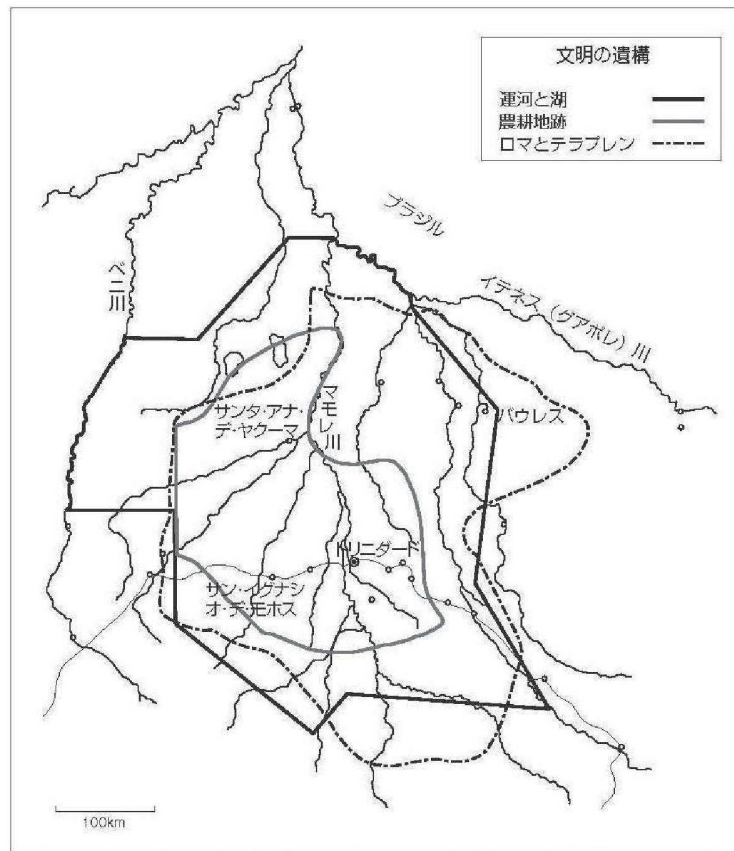


図1 古代文化の痕跡 (Barba, et al., 2003. に基づく)

られるのが広大な運河網である。その総延長はテラプレを凌ぎ、あたかも毛細血管のように大平原を覆っている。様々な運河が存在するが、大規模なものは交通路、小規模なものは水路、あるいは灌漑用水路とみられる。ところでモホス大平原古代文化の痕跡で最も印象的な建造物は人造湖である。総計 2,000 もの人造湖が存在するが、その大半は形状が方形であり、北東―南西の方向を向いている。これらの人造湖の多くは極めて大規模なものである。最大のロガグアード湖は長さ 21km、幅 10km に達する。その他、モホス大平原には広大な古代の農耕地の跡が存在し、さらには多くのサークルが発見されている。



写真1 テラプレン



写真2 ラグーナ・ビルカの湖内運河



写真3 最大の人造湖、ロガグアード湖

3. 発見・研究略史

西洋人によるモホス古代文化の発見は極めて古く、16世紀前半に最初のスペイン人征服者がモホスに到来した時までさかのぼる。彼らが出会ったのは当時この地域に住んでいた先住民族であったが、故郷スペインの道路を凌ぐほどよく整備されたテラプレンや運河の存在に驚嘆した。しかしこの古代文化の本格的な研究が始まったのは20世紀初頭に入ってからである。スウェーデン民族学者エルランド・ノルデンショルド²⁾は1908、1909の兩年マモレ川中流の町ロレト近くの三つの居住地跡、マウンド・フェラルデ、マウンド・ヘルンマルク、マウンド・マシストを発掘する。ノルデンショルドの発掘の目的はインカの文化圏がどこまで広がっているのかを確認することにあった。これらのマウンドから高度な古代文化を予想させる膨大な量の土器片が出土したが、インカ様式とはまったく異質なものであった。ノルデンショルドはこの結果に戸惑ったという。

ノルデンショルドの後、約半世紀にもわたってモホス大平原の古代文化は忘れられてしまう。これは当時支配的であった伝統的なアマゾン観によるものである。この古代文化の存在を再度世界に紹介したのはアメリカ人地理学者ウィリアム・デネヴァンである。デネヴァンはまだカリフォルニア大学バークレー校の大学院生の時にモホス大平原に滞在し、この地域の古代文化について総合的な調査を実施した。その調査の結果は『ボリビア・モホス大平原先住民族の文化地理学³⁾』(1966年)として結晶するが、これは現在でもこの古代文化についての古典的研究である。デネヴァンに続いて、アメリカ人地質学者ケネス・リーが、長期間にわたる現地調査を開始する。リーは民間の研究者であったが、生涯をこの古代文化の研究に捧げ、多くのロマ、テラプレンを発見し、また古代農法に関する興味深い仮説を立てた。

1970年代に入り、この古代文化は近隣諸国の研究者の関心を惹くことになる。チリ人考古学者ビクトール・ブストス、アルゼンチン人考古学者ベルナルド・ドヘルティ及びオラシオ・カランドラである。特にドヘルティとカランドラは1977年～1982年にかけて極めて大規模な考古学調査を実施した⁴⁾。モホス大平原の三つの地域、大平原北西部のベニ川流域、中央部のマモレ川中流域、そして東部のグアポレ・イテネス川流域において、合計50カ所に及ぶ発掘調査を実施した。出土した土器の比較から、これらの地域がそれぞれ異なる文化的特徴を持っていることが判明した。また年代測定の結果、これらの地域の歴史年代が紀元前800年～西暦1300年程度であることが判明した。

1980年代に入り、アメリカ人考古学者クラーク・エリクソンがこれに加わる。エリクソンは当時注目を集めつつあった景観考古学の視点からモホス大平原に残る古代文化の様々な痕跡を調査研究した。その結果、一見自然に見える大平原の景観が実は人工的な起源を持つもので、この地域の過去において古代人が自然環境を大規模に改変したことが明らかとなった。1990年代以降に現れた研究者で特筆すべきは、ドイツ人考古学者ドイツ人ハイコ・プルメーズ、及びスペイン人研究者ホセップ・バルバである。プルメーズは伝統的な方法でロマの発掘調査を実施し、古代の居住地の内部構造を明確にした。一方、バルバは地上調査と衛星探査の両面から、モホスの人造湖、運河網、養魚システム等の調査研究を行い、この古代文化の水利システムの実態を解明しようとした。

4. 調査プロジェクト

しかしこうした先人たちの調査研究にもかかわらず、この古代文化はその一部、表面的な部分が解明されただけであり、その全貌は依然として謎のままである。残されている文化的痕跡から、この巨大な氾濫原に極めて大きな人口を持った社会が成立していたと考えられるが、それがいかなるものであったのかは依然として曖昧模糊としている。とりわけその社会、古代人の生活と文化、あるいは宗教に関してはまったくと言ってよいほどわかっていない。

筆者は2000年にこの古代文化の存在を知って関心を持ち、その実態を解明するために、ボリ

ピアとの共同調査プロジェクトを実施した。このプロジェクトはモホス・プロジェクトと呼ばれるが、ボリビア多民族国文化省（当時の文化庁）傘下の国立考古学研究所（Unidad Nacional de Arqueología）⁵⁾の協力の下に実施された。プロジェクトの第一段階は2005年に開始され、5年間の調査の後2009年に終了した。この共同プロジェクトの目的はモホス大平原の古代文化を総合的に調査研究し、その全体像の解明を目指すものである。とりわけ古代人が実施した自然環境の改変がいかにして実施され、またどういう結果をもたらしたのかを解明することにある。

調査の内容は多岐にわたるが、主要な調査計画を列記すると、発掘調査、測量調査、航空調査、衛星探査、水利システムの調査、生態学的調査、人造湖の調査、農耕地の調査、等がある。すべてが終了したわけではなく、今後の展開を待つ調査もある。また発掘調査の出土物については、土器及び人骨の分析、炭化物の年代測定、DNA分析等を実施した。さらにはこれらと同時進行で民族調査、文献調査を実施した。

本論文の以下の部分において、調査プロジェクトの中核とも言える、古代居住地ロマ・チョコラタリトの発掘調査を取り上げて、その調査結果の内容をまとめてみることにする。またその結果から、ボリビア・アマゾンの古代社会とその文化の実態がいかなるものであったのかを復元してみたい。またモホス古代人の宗教観と世界観がいかなるものであったのかを考察したい。

5. ロマ・チョコラタリトの発掘調査

古代の居住地ロマ・チョコラタリトはベニ県都トリニダード市の東南東約33kmに位置するペロト村にある。ペロト村は人口500人足らずの小さな集落であるが、発祥は19世紀半ばにフランススコ派の修道士たちが建設した伝道地である。かつては教会があり、修道士が常駐していたが、現在では教会も修道士も存在しない。ロマ・チョコラタリトは農業と牧畜以外は産業らしい産業もないこの小村の外れにある。チョコラタリトという名称は、この地に自生するチョコレートの木に因んだものである。ロマの地理上の位置は西経64度37分46秒、南緯14度58分26秒である。高度は基盤で海拔161.00m、最高高度は172.30mである。ロマは200mx400mの形の崩れた長方形をしていて、三方を水路に囲まれているので、地図上で見ると、北東に突き出した半島のように見える。面積は約7.5ヘクタールで、モホス古代社会の中規模の居住地である。ロマの大半は高さ1～2mの低い台地であるが、南東部にかけて次第に高くなっていて、その中心にピラミッド状構造物が存在する。このピラミッド状構造物の最高点はロマの基盤から11.30m高い位置にある。

ロマの周囲にはテラブレン、運河が存在し、この地域に存在する他のロマとつながっている。ロマの北方、わずか500mに小規模なロマ・サムライがあり、兄弟関係にある居住地であったと思われる。またロマの西側2kmにはペロト湖が存在する。比較的小規模な人造湖であるが、それでも長さ3km、幅1.5kmもある。また東側約4kmには高さ24m、面積にして35ヘクタールもある巨大なロマ・コトカが存在する。

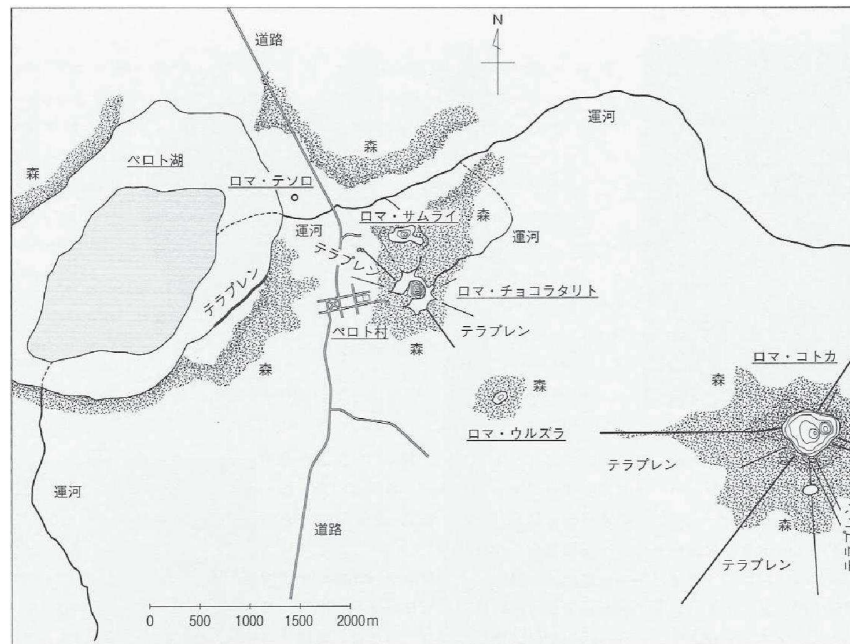


図2 ロマ・チョコラタリト周辺

ロマ及びその周辺には小規模の森が存在するが、そのすぐ外には広大な草原が広がる。森はいわゆる熱帯のジャングルではない。木々も高いものでも30～35m程度であり、この地域の気候的特徴が基本的にサバンナであることを裏付けるものである。近年の伐採によりこの森は毎年縮小しているが、それでも森には非常に豊かな生態系が存在し、サル、アルマジロ、ナマケモノ、野生の豚、ウサギ等の哺乳類、カメ、蛇、矢毒ガエル等の爬虫類や両生類、また多くの昆虫類、そして鳥類が生息している。ロマ・チョコラタリトはマモレ川の東側に位置する。この一帯は雨期に氾濫の影響を受けにくく、ロマは最悪時でも冠水しない。

ロマの発掘調査は2006年に開始され、3年間の作業の後に2008年に終了した。調査開始時にはロマは低木に覆われていて、調査はまずロマの中心部分を伐採することから始まった。発掘調査はロマ南東部のピラミッド状構造物の頂上部に三つ、その周辺に五つ、5m×5m、あるいは2.5m×2.5mの、合計で8つの発掘Unitを設けて行われた。これらの発掘Unitの最大深度は400cm (Unit 4)、最小深度は60cm (Unit 6)であった。ロマの土壌は人工の起源を持つので、水はけは比較的よいが、熱帯の気候環境なので、発掘作業は最新の注意を払って行われた。発掘調査を開始するにあたって、ロマの測量調査を実施した。また地中レーダーによる地下構造物の探査を実施した。さらには発掘開始後も、ロマ周辺地域の測量を同時進行で実施し、ロマ周辺の地形と人工構造物の調査を行った。これに加えてロマ及びその周辺地域の生態系調査を実施した。



写真4 ロマ・チョコラタリト

6. 一般調査結果

ロマ及びその周辺に自生する主な植物 72 種を調査したが、その用途を調べてみると、建材、材料、燃料、果樹、薬草、原料等、人間にとって有用なものが多かった。主なものを挙げてみると、ビボシ、コキーノ、ブランキージョ、タラーラなどの建材木、モタク（シュロ）、トゥトゥマ、カベサ・デ・モノ（サルの頭）等の材料木、トロンハ（グレープフルーツ）、チョコレート、マンガーなどの果樹、またマティコ、ワイルル、リマ・ペルシア等の薬草、ヤシ、クシ、ウルクー等の原料木がある。これらの植物は純然たる野生ではなく、おそらくは古代人が意図的に周辺に栽培したもので、この地域の植物生態系全体が、いわゆる半人工化された「家の庭⁶⁾」であったと考えられる。ロマの放棄後この「家の庭」は放置され、植物は再度野生化したものであろうと思われる。

3 年間の発掘調査の結果、ロマから膨大な量の出土物が発見されたが、その大半は土器片である。出土した土器片は合計で 33,000 点以上にも上った。ロマの 5 分の 1 は土器であると言われるが、実際に発掘してみて、文字通り、ロマの表面から下 2 ～ 2.5m は土器片で埋め尽くされているという印象であった。ただ全ての場所が一樣にそうであったわけではない。ピラミッド状構造物の下、西側に設けられた発掘 Unit 3 からは 21,500 点もの土器片が出土した。この Unit はピラミッド状構造物の頂上から 5.248m 低い位置にある。また Unit 3 周辺の Unit 5、Unit 8 からも多くの土器片が出土した。さらにはピラミッド状構造物の南側斜面下の Unit 7 からも多くの土器片が出土した。これらと対照的にピラミッド状構造物の頂上部に設けられた Unit 1、2、あるいは 4 から出土した土器片は極めて少なかった。

このピラミッド状構造物は居住区画、ゴミ捨て場、あるいは墓地ではなく、何か特別な目的を持ったものであったと思われる。その高度からして、おそらくは見張り台、宗教祭儀の祭壇、あ

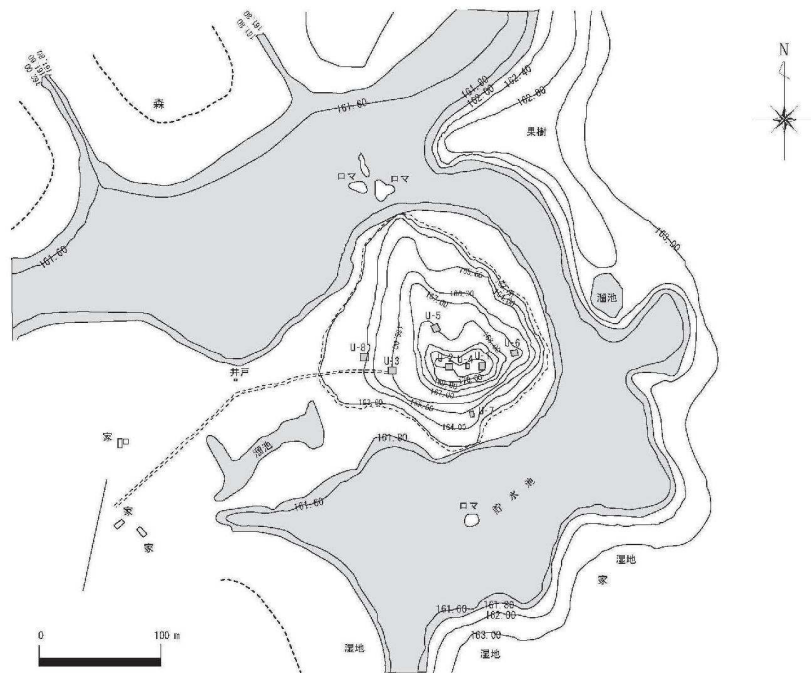


図3 ロマ・チョコラタリト (最大冠水時)

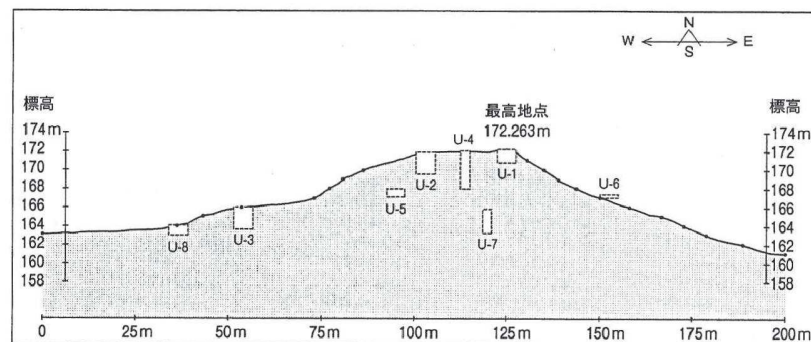


図4 中心部東西断面図

るいは天文観測所であったであろう。また上部に神殿が建っていた可能性もある。さらには、年代測定の結果では、このピラミッド状構造物が非常に新しく、ロマ・チョコラタリト社会の最後の段階で建造されたことが判明した。

土器片に次いで大量に出土したのは動物の骨である。動物の種類には大きなバラエティがあったが、これらの動物の大半は現在でもモホス大平原に生息している。哺乳類ではリス、牛、ジャ

ガー、シカ、ヤマネコ、ヤマブタ、カピバラ、アルマジロ、タテガミオオカミ、キツネ、ウサギ、オオアリクイ、ホチ等、爬虫類ではカメやカイマン等、また鳥類ではバト（モホスコウノトリ）やパイヤ（サギの一種）等が含まれていた。これらはいずれも現在のモホス大平原に住む動物である。

以上の動物に加えて、魚の骨もまた発見されたが、特定できたものは予想外に少なく、ブチエーレ、ベントン等、数種類に限られた。その理由は、魚の骨は小さいので残りにくかったからだと思われる。これらの魚類の多くは肺呼吸をすることができ、モホス独特の自然環境に適応したものである⁷⁾。

動物の骨に次いで大量に出土したのは、モホスに生息する貝である。この貝は通常カラコル⁸⁾と呼ばれるが、正式な名称をスクミリングガイという。

これらの動物、あるいは魚介類は古代人が食用にしたものであると考えられるが、中には死者の埋葬時に供物として捧げられたものが含まれていると思われる。というのもこれらは、しばしば、人骨の周囲から、あるいは儀式用壺の中で発見されたからである。モホス古代人は魚介類の養殖を行ったという仮説が立てられているが、発掘調査でそれを確かめることはできなかった。

土器片、動物の骨、カラコルに加えて、17 個の甕棺、16 体の人骨が出土した。最も多く甕棺が出土したのは Unit 3 で、合計で 12 個発見された。甕棺の大きさ、デザインは千差万別であったが、全体として小ぶりで、最大でも直径 80cm、高さ 50cm 程度であった。人骨が最も多く出土したのもまた Unit 3 で、10 体の存在が確認された。またその他にも複数の人骨の破片が発見された。これらの人骨の多くは土葬であったが、中には甕棺の中から発見されたものもある。

これらの出土物のうち、主なもの 1,335 点を重要出土物として選別し、カタログ化して整理保管し、後日詳細な分析を実施した。また各 Unit から多くの年代測定用の炭化物サンプルを採取し、そのうち 36 点について放射性炭素による年代測定を実施した。また DNA 分析用の歯のサンプルを採取し、その一部について mtDNA ハプログループの分析を実施した。

7. 民族

以上の一般的結果を基に、これから、ロマ・チョコラタリト古代社会の復元を試みたいと思う。

この居住地にはいかなる人々が住んでいたのか。出土した人骨のうち、Unit 3 出土の 10 体を詳細に分析したが、いくつかの顕著な特徴があった。はじめに、これらの人骨の身長が最大で 165cm とかなり低かったことが挙げられる。これは 2005 年に筆者が試掘を行ったロマ・パンチヨロマンから出土した人骨が 175 ～ 180cm もあったのに比べると対照的である。またこの地域の他のロマにおける発掘では 200cm の巨人の存在が確かめられている。このことは、おそらくは、モホス大平原中央部には異なる複数の民族が居住していた可能性を示唆するものであろう。

次に興味深い事実は、埋葬人骨の半数が死亡時に 20 歳以下であったことである。中でも 2 体は 3 ～ 4 歳の子供であった。うち 1 体は身長が 70cm 程度であり、発見時に小人ではないかとの

憶測もあったが、分析の結果子供であることが判明した。若年層の多さは意外な結果であるが、当時の平均寿命がかなり短かった可能性があるかもしれない。

しかしながら人々の骨格はよく発達していて、一様にながっしりしていて骨太であった。これは古代人の栄養状態が非常によかったことを意味する。しかし同時に、重い物を運ぶ重労働に従事していたことをも暗示している。想像するに、モホス古代社会はおそらくは十分な食料生産力を持つ豊かな社会であった。しかしエデンの園であったわけではない。熱帯の高温多湿な気候環境の中で、人々は年少の頃から農作業、漁労、あるいは建設の労働に従事し、肉体的に激しい消耗を強いられたものと思われる。実際に、これらの人骨の中には、椎間板ヘルニア等の持病を持っている人物も存在した。

歯学分析の結果、これらの人骨がモンゴロイドの特徴を持っていることが判明した。また、DNA分析を実施した人骨の mtDNA ハプログループは A であった。これは日本人とも共通するものである。

ではロマ・チョコラタリト古代社会の人々はどのような人々であったのか。彼らは民族的にはどこに起源を発し、またどういう言語を話したのか。彼らの民族的アイデンティティに関しては情報に乏しく、現在の時点ではあくまで推定の域を出ない。しかしおそらくは現在のモホス先住民族の遠い祖先であったろうと考えられる。そう考えられる理由の一つとして、ロマ・チョコラタリトの発掘で出土した道具等がこれらの先住民族の間で依然として使われていることがある⁹⁾。また古代の埋葬文化とこれらの先住民族の埋葬文化の伝統の類似性が挙げられよう¹⁰⁾。さらには、言語学的にも、南米古代における二大語族であるアラワク語族及びトゥピ・グアラニ語族の諸言語がモホスの先住民族の中に存在する¹¹⁾。ロマ・チョコラタリト近郊に住むモホ族の言語はアラワク語族、またシリオノ族のそれはトゥピ・グアラニ語族に属する。こうしたことを考えると、現在のモホス先住民族とモホス古代人との間には何らかの血縁関係があると思われるのである。

8. 歴史

ロマ・チョコラタリト古代社会の歴史とはいかなるものか。この社会はいつごろ成立し、いかなる発展をしていつごろ最盛期を迎え、またいつごろ消滅したのか。またその古代社会の各時期の特徴とは何であったか。残念ながら、現段階でこうした問いに明確に答えるのは不可能に近いと言えよう。ロマ・チョコラタリトはモホスの一古代居住地にすぎず、また何よりもモホス大平原に存在した古代社会についての知識が極めて限られているからである。したがって正確な復元を行うことはできないが、しかしこれまでに得られたデータから、この知られざる古代社会についてある程度の推定をすることはできよう。

ロマ・チョコラタリトにはいつ頃から人々が住み始めたのか。最も詳細に年代測定を行った Unit 3 を例にとると、得られた最古の年代は calAD10 ~ 210 (深度 236cm)、また最新の年代は calAD1320 ~ 1440 (深度 25cm) であった。したがってこのロマに今から 1,800 ~ 2,000 年前に

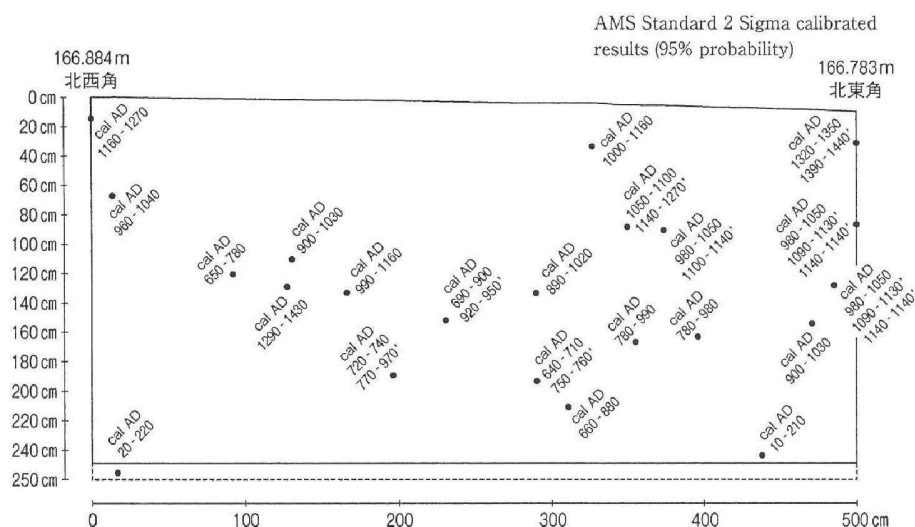


図5 Unit 3 年代測定結果

はすでに人々が住んでいたことになる。この Unit は最深部で 240m まで発掘されたが、さらにその下にも小規模な文化層が存在していた。またピラミッド状構造物の南側斜面の Unit 7 は Unit 3 よりも 1.385m 低いが、そこでの最古年代は calAD120 ~ 260 (深度 244cm) であった。この Unit は 250cm まで発掘されたが、さらにその下に、甕棺群を含む本格的な文化層が存在することが確認された¹²⁾。これらの結果を総合すると、おそらくは紀元前数百年頃、あるいはそれ以前から、ロマ・チョコラタリトにはすでに人々が定住していたものと考えられる。またこのことは同一地域の他のロマの歴史年代ともほぼ一致するものである。

しかし初期のロマは小さな社会であったと思われる。おそらくは人々は現在ロマが位置する場所に自然のままの状態で居住していた。やがて社会は少しずつ発展し、ロマの基底部¹³⁾が造られることになる。この基底部は高さがせいぜい 1m ~ 2m 程度のプラットフォームであるが、モホスのすべてのロマにおいて見られる基本構造である。その後の長い期間、人々は基底部の上に構造物を造り居住を続けるが、しかしこの期間には目立った社会的、文化的変化はなかった。

大きな変化が起きるのは西暦 600 年を過ぎた頃である。この時代に出土物の量が飛躍的に増加する。ロマの規模が大きくなり、また高度が高くなる。出土物の量と質、また年代測定の結果から推定すると、この社会は西暦 700 ~ 850 年頃に最初の繁栄期を迎えたものと思われる。優れた土器が製作され、また工芸文化、宗教文化が一気に開花したものと考えられる。この時期に製作された土器の大半は刻印土器であるが、そのあるものは極めて傑出したデザイン性を持つ。しかしその後西暦 850 ~ 1050 年にかけて、この社会は約 200 年にもわたって停滞した気配がある。というのも西暦 850 年前後に出土物の量が激減する時期があり、その後緩やかな回復を見せるが、以前のレベルに達するのは 11 世紀に入ってからである。

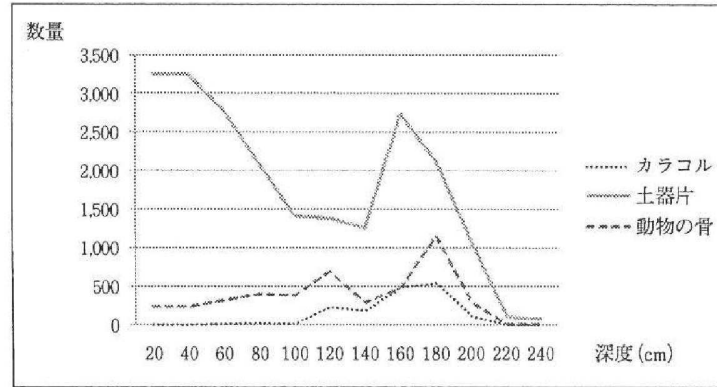


図6 出土物量と深度 (Unit 3)

この理由は不明である。しかし一つの興味深い事実がある。それはこの時期には土器片だけではなく、動物の骨やカラコルの量もまた激減するのである。これはロマ・チョコラタリト社会が、一時的ではあるにしろ、かなりの危機的状況に直面していたことを示唆するのかもしれない。その時おそらくロマの人口は激減した。そしてその原因は動物やカラコルの出土量が激減したと関係があるかもしれないのである¹⁴⁾。

一度危機に瀕したロマ・チョコラタリト社会が再生するのは西暦 1000 年頃を過ぎた頃である。再度社会活動が活発になり、西暦 1050 年頃から第二の繁栄期が訪れる。出土する膨大な量の土器片から推定すると、この時期には顕著な人口の増加があったと思われる。おそらくはロマ社会の人口は倍増、あるいはそれ以上に増加したものと思われる。またロマの高度がさらに高くなり、最終的に現在ある形状になったものと思われる。この時期の土器の特徴は、その量の多さと頻繁に見られる彩色土器の存在である。しかし質的な視点から見ると、むしろ第一の繁栄期のそれと比較してあまり特徴がないようにも思われる。また土器の出土量の増加と反比例して動物の骨とカラコルの出土量は減少し続ける。とりわけ動物の骨は最後にはまったく出土しなくなる。

もう一つ興味深い事実は、この時期にアンデス高地に栄えたティワナク文化の影響が見られることである。ティワナクは西暦 750 年頃領土の拡大を始めて大帝国となるが、やがて衰退を始め、1289 年に滅亡する。したがって西暦 1100 年前後にティワナクの支配がモホスにまで及んでいたとは考えにくい、その文化的伝播はモホス大平原中央部のロマ・チョコラタリトにまで達していたと思われる。出土物の中には三段の階段模様が描かれた土器が存在するが、これはおそらくはティワナクの世界観¹⁵⁾、三つのパチャ（世界）を表しているものであろう。また出土した円盤型装飾品の中には様々な十字架模様が存在するが、これらもティワナクの十字架と類似するものである。

ロマ・チョコラタリト社会は西暦 1200 年頃から衰退を始め、1300 年代の半ばまでにはロマは放棄されていたと思われる。この衰退、放棄の理由が何であったのかは不明であるが、いずれに

しても約 2000 年にわたって存続した古代社会はここに幕を閉じた¹⁶⁾。

9. 土器

ロマから出土する膨大な量の土器片からもわかるように、モホスの古代人は熱心な土器製作者であった。これはモホス大平原中央地域が沖積平野であること、また氾濫原であることに関係していると思われる。つまり本格的な石材が存在せず、また木材は貴重品であったということである。古代人はその代わりにふんだんにある土を焼いて土器を製作した。そして様々な生活用品、台所用品、道具類、アクセサリー、また土偶、副葬品等の儀式用品を作った。これらの土器はおそらくは地面の上で直に焼かれたものと思われる。というのもこれまで土器を焼く窯が発見されていないからである。また発掘してみると、場所によっては地層が赤く焼けたり、白く灰化していた。使われた燃料は、おそらくは、モホスではあまり潤沢にはない、貴重な木材であったろう。

ロマ・チョコラタリトにおいて出土した土器類の多くは土器片であるが、中には完全体の土器も存在した。これらの土器の大半は刻印土器であるが、同時に彩色土器もまた存在する。彩色土器は後期になるにつれて多くなる。

出土土器のうちで目立つのはやはり甕棺である。大きさはまちまちであるが、全体として小ぶりで、巨大なものは存在しなかった。デザインもまたバラエティに富み、特に小型の甕棺に優れたものがあつた。またいくつかの甕棺の中から小さな儀式用壺が発見された。ロマ・チョコラタリトで出土した土器はほとんどが壊れていたが、甕棺の中で見つかったものは例外的に無傷であつた。これらの壺は副葬品、あるいは供物を入れるためのものだと思われる。他の土器製品で目立ったのは一連の円盤型装飾品である。これらの装飾品は最初その形状から紡錘車、あるいは貨幣であると思われたが、表面に複雑な模様が彫られていて、またすべての模様が異なっていた。また 86 個の、珍しい土器製のビーズが発見された。平均して直径 5mm、内径 2mm の非常に細かなもので、人骨の胸部付近から発見されたことから、埋葬された人物のネックレスではなかったかと思われる。最後に、小さな土器作品であるが、何かを握っているその手を別の手が握っている、不思議なデザインの土器片が発見された。これはより大きな土器作品の一部であると思われるが、非常に興味深いものである。

さて興味深いのは土器、土器片に描かれた模様、デザインである。ここにはアマゾンの他地域にはない、モホス独特の模様が見られる。まず目立つのは直線による模様である。古代人は直線を好んだようで、一本、または数本の直線が交差し、模様を形成している。直線模様の変形として、ジグザグ模様や、折れ線、点線模様が存在する。同時に、曲線による模様もまた存在する。曲線模様として、波線、蛇行、あるいは弧等のバリエーションがある。また螺旋模様がかなり頻繁に見られる。さらには斑点模様があり、また多くの小さな穴を開けた模様がある。ユニークなものとしては、植物の葉のような模様、蛇皮のような模様、そしてトカゲの皮膚のような模様が存在する。さらに複雑な模様も存在する。絵物語のような模様、抽象画のような模様等である。

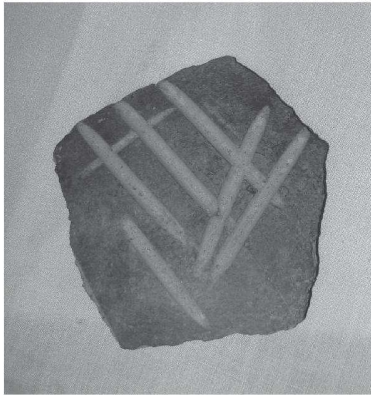


写真5 土器模様



写真6 農耕地跡

これらの模様のあるものは土器の口縁部によく見られるものである。たとえば多くの土器の口縁部には平行した線、波線、点線、突起、あるいはこれらを組み合わせた刻印またはレリーフの模様が見られる。何度も繰り返されるその特徴から、おそらくは土器製作の固有な伝統様式を示すものであろうと考えられる。

興味深いことに、これらの模様の多くは一過性のものではなく、ロマの歴史を通して存在した。その一例が数本の直線が平行して交差する模様である。この模様は鋭い、彫刻刀のようなもので削られているが、実在するモホスの農耕地跡を思わせるものである。これはこの土器文化の伝統が継続して維持されたことを示している。

10. 埋葬

ロマ・チョコラタリトの埋葬は独特なものである。発掘調査の結果土葬と甕棺葬の二形態が存在したことが判明した。Unit 3 出土の 10 体の人骨のうち少なくとも 5 体が土葬であった。5 体のうち 4 体は埋葬の方角に特徴があった。すべて頭、もしくは足を北北西に向けられていた。おそらくは北北西、あるいは南南東が聖なる方角であるためであると思われるが、それが何であるのかは現在のところ不明である。またこれらの 4 体のうち 3 体は伸展葬、1 体は、胴体と足を横向きにして折り曲げた、変則的な屈葬であった。残りの 1 体は 3 歳半ぐらいの女兒であったが、頭蓋骨と胴体が垂直に埋葬され、かつ手足が切断されて首の後ろに置かれていた。この子供は生贄にされたのであろうか。それとも何者かに殺害されたのであろうか。いずれにしても異常な埋葬形態であり、何故こうした埋葬が実施されたのかはわからない。

さらに興味深いのは甕棺葬である。前述したように、これらの甕棺は小型のものであり、人体を切断しない限り、成人を収容することはできない。したがって最初から人骨のみを収納したものと思われる。またある甕棺には、一体以上の、複数の人骨の存在が確認された。これは何を意

味するのか。

ロマ・チョコラタリト社会に複葬の習慣があったことを示唆するものである。複葬は二重埋葬とも呼ばれ、二度にわたって埋葬することである。最初の埋葬は一次葬と呼ばれ、死体を白骨化する。二回目の二次葬において人骨が甕棺に納められる。複葬の方法は伝統によって異なり、ロマ・チョコラタリト古代社会の複葬がどういう形態であったのかは不明である。しかし参考になる手掛かりも存在する。モホス大平原中央から南東にかけて居住するシリオノ族、グアラヨ族等の埋葬文化である。これらの先住民族はモホス古代社会の伝統を何らかの形で受け継いでいると思われるが、ごく最近まで複葬の習慣が存在していたことがわかっている。シリオノ族の伝統では、人間は死ぬと火の傍で乾燥され、白骨化した後埋葬されたという。またグアラヨ族の場合は、死者は一定の期間近くの森に放置されたという。その意味では自然葬であるが、しかしそれは第一段階にすぎない。その後、残った骨だけを拾って再埋葬が行われたという。類推するに、ロマ・チョコラタリト古代社会においても類似の習慣が存在したものと思われる。

複葬の習慣は世界中に存在し、特に珍しいというわけではない。しかし土葬と甕棺葬の両者が同一の場所に混在するというのは、他にも例はあるが、それほど一般的ではない。しかも両者は発見された位置からしても、同時代に存在したものと思われる。このことは何を意味するのか。一つの可能性としては、やはり、この古代社会に複数の埋葬伝統、複数の文化伝統が存在したということであろう¹⁷⁾。

11. 動物信仰

動物信仰は世界中に存在するが、アマゾンの古代においても存在した。ロマ・チョコラタリト古代社会においてはどうかであったか。出土物から見ると、とりわけ、鳥と蛇が重要であったと思われる。Unit 3 で出土した完全体人骨の人物の右手に握られていた笛はバトの翼骨でできていたが、バトはモホス大平原に棲む巨大なコウノトリである。この笛はピーファノ¹⁸⁾と呼ばれる縦笛であるが、現在でもモホス先住民族の間で使われている。

また Unit 3 出土のシカの角の彫像は、この地域に棲むスムルククという小型のフクロウを模ったものである。モホス大平原は巨大な湿地帯であり、世界でも有数の鳥の王国として知られる。この地で鳥が重要視されたのはごく自然なことだと思われる。

では鳥は何を意味していたのか。おそらくは太陽の象徴であったと思われる¹⁹⁾。それを暗示する興味深い伝統舞踊が残されている。毎年7月下旬に行われるサン・イグナシオ・デ・モホスの大祭の最大の出し物はマチェテー口の踊り²⁰⁾である。マチェテー口は31～33個の鳥の羽根で出来た頭飾りを付けて首を前後左右に振って踊りながら行進する。マチェテー口の動作は鳥の動きを、頭飾りは太陽の光線を表しているものと思われる。おそらくは古代モホスに存在した太陽信仰が複雑な経緯を経て、伝統芸能として様式化されたものであろう。

またロマ・チョコラタリトからは、蛇皮模様、あるいは蛇が這った跡のような模様を持つ土器



写真7 ピーファノ

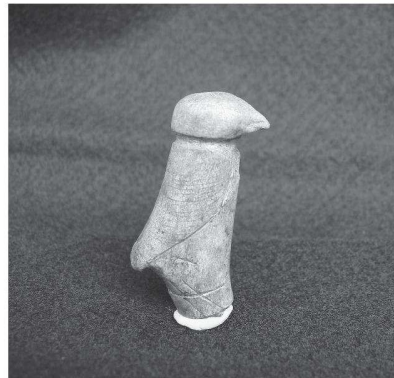


写真8 スムルクク



写真9 マチェテー口の踊り

が出土したが、この古代社会において蛇が重要な動物であったのは間違いない。モホス大平原には巨大な水生の蛇、アナコンダが生息している。この大蛇は長さが十数メートルにもなり、現在でも各地の湖で目撃されている。モホス古代人にとってアナコンダはおそらくは恐怖と畏怖の対象であったであろう。つまり絶対的な力を持つアマゾンの自然の象徴であった。それを証明するかのように、モホス各地にはアナコンダにまつわる多くの伝説が存在する。有名なサン・イグナシオ・デ・モホス近郊のイシレレ湖の伝説では、水を汲みに来た母から引き離された子供が湖の犠牲になり、その結果湖の水量は増え、人々に恵みをもたらす。湖に住むアナコンダは子供の化身であり、湖の守護神である。やはり蛇は大地の支配者なのである²¹⁾。

以上に述べた、ロマ・チョコラタリト社会における重要な動物―鳥と蛇―の存在を象徴するかのような出土物がある。鳥と蛇の十字架模様の装飾品である。鳥と蛇は最終的には農耕民族であったモホス古代人の社会基盤を表象するものであろう。すなわち太陽と大地（水）が農業には不可欠であるということである。

鳥と蛇に加えてモホスで重要であった動物はジャガーである。ジャガーは中南米の古代文化に

において最も神聖視された動物であり、中南米全域にジャガー・カルトが存在する。マヤのジャガー神官、チャビン・デ・ワンタールのジャガー人頭²²⁾等が有名であるが、これらの起源はおそらくはアマゾンである。ジャガーの語源はアマゾンの先住民族グループ、トゥピ・グアラニ語族、トゥピ語の *yaguareté* (本物の動物) である。ジャガー・カルトはモホスの古代においても存在し、これまでにジャガーの歯の装飾品等が出土している。ロマ・チョコラタリトにおいてもジャガーの骨が出土した。ジャガー・カルトは実際に比較的最近までモホス先住民族の間で存在していたことがわかっている。17 世紀にモホスに滞在したスペイン人修道士の報告によれば、バウレ族には顕著なジャガー・カルトが存在したようである²³⁾。バウレ族のあいだではジャガーはアラママコ (大酋長) と呼ばれ畏怖された。森でジャガーと遭遇して殺された者は、所有物はジャガーの持ち物とみなされ、没収されて焼却されたという。しかし遭遇から奇蹟的に生還した者は、ジャガー・スピリットの加護を受けた者として神聖視された。彼らはカマコイと呼ばれる特殊なシャーマン・グループを形成した。ここではジャガーは力、権力の象徴として、極めて政治的な意味を持っていたことがわかる。

12. 世界観

ロマ・チョコラタリト古代人の世界観とはどういうものであったか。この問いに答えるのは容易ではないが、いくつかの手掛かりを頼りに論を進めてみよう。

ロマ・チョコラタリトの最初の繁栄期に製作された印象的な儀式用壺がある。この壺は甕棺の中から発見されたものだが、供物を入れる容器であったと思われる。さてこの壺には二つずつペアになった4組の、合計で8個の不思議な突起が存在する。このデザインは何を意味するのか。その意味をここで特定することは困難であるが、モホス古代文化において8が重要な数であった可能性がある。何故なら8はモホス構造物のレイアウトにおいてもしばしばみられるからである。たとえばテラプレンで8角形に周囲を囲まれたロマが存在する。8はまたアメリカ大陸のほかの古代文化においても重要な数であった。たとえばインカにおいて8は完全数の一つであり、2組のカップルを表していた。このことはまたマヤにおいても然りで、8は人間の性行為を表し、そのためマヤ神聖暦の元旦は8バツツである。はたして8はアマゾンにおいても類似の意味を持っていたのであろうか。いずれにしても8はモホス古代文化において重要な数であったと思われる。

ロマ・チョコラタリトからはまた様々な模様が彫られた多くの円盤型装飾品が出土した。中でもとりわけ特徴的であったのは十字架の模様である。様々な十字架模様があり、二本の線が交差したシンプルな十字架もあれば、鳥と蛇が交差する手の込んだ十字架もある。二本の線が交差する十字架は基本方位を表示しているが、周囲にはまた放射する太陽の光線らしきものが描かれている。この十字架は静的で安定した世界を表していると思われる。これと対照的に鳥と蛇の十字架は回転する十字架であると考えられる。この種の十字架は卍、スワスティカ等と呼ばれ、世界各地に存在するが、動的な世界を表象している。モホス古代人は世界が絶えず生成流転の過程に



写真 10 八つの突起を持つ儀式用壺



写真 11 8角形にテラプレレンで囲まれたロマ

あることを認識していたものと思われる。

十字架のシンボルには様々なバリエーションが存在するが、その意味は一般に基本方位、四大要素、世界等を表す。たとえばマヤの十字架は世界、物質を表象するシンボルである。しかしその奥にあるものは二元論的思想である。十字架は二本の腕の交差で作られていて、二つの要素が相互関係を持っていることを意味するものである。

これらの十字架模様の装飾品はロマの上層部分から出土した。時期的にはロマ・チョコラタリト社会の第二の繁栄期に相当するものと思われる。したがって当然ティワナク文化の影響が考えられるが、しかしまったく異質な外来文化かと言えばそうとも言い切れないようである。二元論的傾向はそれ以前からモホス文化にも存在したようなのである。また一般にアマゾンはアンデスよりも年代的に古いという事実もある²⁴⁾。

たとえば再び古代建造物の話をすれば、多くの人造湖、あるいはロマが対になって存在しているという事実がある。とりわけ人造湖において顕著で、多くの人造湖が大小二個の対として存在している。また多くのロマがやはり対になって建設されている。ロマ・チョコラタリトと隣接するロマ・サムライもまたその一つと考えられる。こうした対になった人造湖、あるいはロマの形態を技術的あるいは社会的な理由に求める研究者もいるが²⁵⁾、それだけでもないと思われる。二元論的世界観は世界中にみられるが、モホスの古代においてもやはり存在した可能性が大きいと考える。

土器の模様に加えて、ロマ・チョコラタリト古代人の世界観を知る上で手掛かりになりそうなものに方角がある。ロマ・チョコラタリトのピラミッド状建造物の頂上部は細長い平坦地で、そこには二つの峰が存在した可能性がある。それを結ぶと東西の方角となり、太陽の通道、つまり黄道を表している。こうしたロマのデザインは普通に見られるようで、ロマ・チョコラタリトの東方、カサラベ近郊の巨大ロマ、ロマ・リカでも確かめられている。またロマ・チョコラタリトは長方形をしていて、北東―南西に方向付けられている。これはモホス人造湖の方向性と同じ



写真 12 鳥と蛇の十字架模様

である。この方角に関しては諸説あるが、おそらくは天体との関係を示すものと思われる。天文学的数据によれば、モホス大平原において、北東の方角に見られる顕著な天体はプレアデス星団（M45）である。この散開星団が最も目立つのは12月～1月で、モホスでは雨期の始まりであり、作物の種まきが行われる。反対の南西の方角には6月～9月に南十字星が見られる。この期間は乾期であり、大平原では野焼きが行われる。いずれにしてもそこに見え隠れするのは農業との関係である。

方角で興味深いのは、また、土葬された人骨の方角である。Unit 3における人骨は北北西―南南東に埋葬されていた。同様の埋葬方角は試掘したロマ・パンチョロマンにおいても見られた。したがってこの地域に共通する方角であると思われるが、それが実際に何を意味するのかは正確にはわからない。特定の天体、人造湖、あるいは山を意味するのか。残念ながらこの方角に存在する顕著な自然物は確認することができなかった。

すると方角そのものが象徴的な意味を持っていたのであろうか。死者の頭をある方角にして埋葬するのは世界中にみられる習慣である。現代のモホス社会では死者は頭を東にして埋葬される。これはキリスト教の影響のためである。現代モホス人の大半は―先住民族も含めて―カトリックであり、したがって聖なる方角は東である。だが民族調査の結果によれば、そう遠くない過去においては北向きに埋葬されていたことがわかっている。したがってロマ・チョコラタリトにおける埋葬の方角がかつてモホスにおいて一般的であったことは間違いないと思われる。つまり北が聖なる方角であり、そこに死者の国が存在したのである。これはかつて日本に存在した習慣と同じである。

しかしやはり気になるのは、まったくの北の方角ではないことである。死者はそこからわずかに西にずれて北北西―南南東に埋葬されていた。これが何を意味するのかは依然として謎である。その解明のためにはこの古代文化の内容をより詳しく知る必要があろう。

13. 宗教

それではロマ・チョコラタリト社会の宗教文化はどういうものであったのか。おそらくは一種のシャーマニズムであったと思われる。そしてそれはその末裔である現代アマゾン先住民族のシャーマニズムとそれほど異なっていたはいなかったであろう。

前述したように、ロマ・チョコラタリトからは右手に縦笛（ピーファノ）を握った人物が出土した。この人物はおそらくは古代の宗教的指導者、シャーマンであったと思われる。笛は古代において聖なる楽器であった。古代の司祭、あるいはシャーマンは笛を吹いて精霊と交信し、宗教祭儀を執り行った。この伝統は現在でも世界各地に残っており、たとえばクスコのシャーマン、パコ²⁶⁾はサンポーニャを吹いてアブー²⁷⁾（山の神）を呼び出す。推定するに、ロマ・チョコラタリトのシャーマンもまた同様の宗教行為を行ったと考えられる。そして実際にモホスにおいては宗教文化における笛の存在は極めて大きかったと思われる。

モホスの代表的先住民族であるモホ族には一つの興味深い文化伝統が存在する。それは音楽の伝統である。17世紀～18世紀にモホスを訪れたヨーロッパ人修道士、探検家者等の報告によれば、モホ族はありとあらゆる機会に音楽を使用したようだ。埋葬時だけではなく、結婚、出産等、社会生活の節目の行事には必ず音楽が演奏された。そしてその時使用されたのは木管楽器群である。大小様々なものがあり、小さな縦笛から巨大なチューバのような木管まで存在した。これらの楽器は一種の神具であり、モホ族のコミュニティにはそれを収める聖なる倉庫が存在した。これらの木管楽器は現在でもモホスの祭りで使用されている。これらの木管楽器群は一般に木管複合（笛複合）と呼ばれ、現代アマゾンの多くの先住民族にみられるものである²⁸⁾。

木管複合は何を意味するのか。そこにアマゾン先住民族の世界観、死生観が表象されていると思われる。彼らは死者の世界とその霊力を信じ、極めて手の込んだ埋葬文化の伝統を創り上げた。



図7 19世紀モホ族の木管複合（出典：Nordenskiöld, Erland. 2003.）

複葬の習慣はその一つである。そしておそらくは骨が生と死をつなぐ一種の媒体であると考えた。したがって笛は骨によって造られているのである。言い換えると、笛は死者の声を聞く道具であり、音楽は死者の国からのメッセージなのだ。また、ロマ・チョコラタリト出土のピーファノはバトの骨でできている。これは古代人の鳥信仰を表すものであるが、同時に鳥は太陽の化身でもある。したがってこの縦笛は古代人の太陽信仰の象徴でもあったのである。

ロマ・チョコラタリトにはどのようなシャーマンが存在したのか。これに関しての直接証拠は存在しないが、この地に住む先住民族、モホ族についての過去の記録が残されていて、モホス古代のシャーマンについて類推するための参考となる。18世紀の年代記作者の記述によれば、当時のモホ族の間には二種類のシャーマンが存在していた²⁹⁾。一つはコモコエスと呼ばれる通常のシャーマンで、病気や怪我の治療が主な仕事であった。もう一つはティアラウキスと呼ばれるシャーマンで、より高度な役割を担い、予知、予言を行った。前者が個人営業的な治療師、呪医であるのに比べ、後者は共同体の安全と繁栄を守護するコミュニティの司祭であると言えよう。こうしたシャーマンの分業と区別は現在でも各地で見られるものである。モホ族はスピリットの存在、また死者の世界を信じていた。シャーマンの主な役割は依頼者や共同体のために霊的世界と交信することであった。

18世紀モホスの宗教文化はモホス古代の伝統そのものではないが、同一地域の宗教伝統であり、遠い過去においてもそれほど隔たっていたとは思われない。おそらくは類似のシャーマンが限りなく遠い昔から存在していたことであろう。

ロマ・チョコラタリトは後年ティワナクと文化的交流を行ったと思われる。ティワナクの世界観は、ピラコチャのシンボルやアンデスの十字架に象徴されるように、アンデス的二元論である。ティワナクにはまた三つのパチャ³⁰⁾（世界）の概念があった。この三つのパチャとはアラシュ・パチャ（天界）、アカ・パチャ（現世）、そしてマンカ・パチャ（地下世界）である。言い換えれば、天空（太陽）、大地、そして地下（水）である。



写真 13 古代のシャーマン（Unit 3）

ロマ・チョコラタリトにもまたこれらのパチャを表現したと思われる土器模様が存在する。ロマ・チョコラタリト文化にどの程度パチャの概念が定着していたのかは定かではない。しかし発掘調査で判明したことを総合すると、それほど距離的に遠くない両文化の世界観、死生観の間には多くの類似点が存在するように思われる。その視点に立ってみると、両者の間には予想以上の昔から文化的関係が存在した可能性があるかもしれない。

14. 環境思想

ただしティワナクに比較すると、モホス古代社会の宗教文化は、おそらくは、より自然に近い、自然との共生の理念をもって形成されたと思われる。そこにアマゾンの大地に根差した、モホス古代人の死生観、そして自然観が存在すると思われるからだ。モホス全域に残る古代の建造物の痕跡を調べてみると、モホス古代人が極めて優れた水利・土木技術を持っていたことがわかる。その意味ではモホス文化は高度な技術文化であった。彼らはアマゾンの氾濫原という過酷な自然環境を、そこでの社会生活を可能にするために大規模に改変した。しかし力でもって自然を征服しようとしたわけではなかった。あくまで自然の摂理を理解し、その上に立って、持続可能な社会を建設しようとしたのである。その例証となるのが多くの土の構造物である。これらは巨大ではあるが、すべてが土で建造されている。たとえばロマは根本的に土の構造物である。たしかに表層部には多くの土器片が散乱しているが、その内部には構造物らしきものはこれまで発見されていない。モホス古代人は優れた土器の製作者であった。したがってレンガによる道路、運河、神殿等を造り、あるいは都市を建設することも不可能ではなかったはずだ。建造物の強度や永続性、また衛生環境という点からみると、その方がより高度な技術であるはずである。しかし何かそれをあえてやらなかった。

何故なのか。ロマが自然の生態系の一部として機能するよう構想されていたからである。それにははっきりした理由があった。モホス大平原がアマゾンの巨大な氾濫原であるからである。この氾濫原の巨大さは実際に見てみなければわからない。最近の例を挙げれば、2008年の大氾濫においては何と16万km²が冠水した。通常の年の氾濫はこれほどひどくはないが、それでもそこに点在するロマの多くは孤立して島となる。雨期にはテラプレノも道路としては使えず、人々は水上交通のみで往来したと思われる。またロマは人間にとってだけでなく、大平原の動物や鳥にとっても避難地でもあったと思われる。言い換えればロマは独立した生態系を持った一種の小宇宙であった。したがってロマは可能な限り自然物でなければならず、そこには森がなければならなかったのである。

ここにはアマゾンの大自然と現実の経験から生まれた民族の知恵、また環境思想が存在するように思われる。それはすべてが循環する自然のサイクルの中で存在し、人間はその摂理に従って生きなければならないという考えである。この考えは現代のモホス先住民族文化の中にも伝統として残されている。古代の伝統が比較的よく保存されている、モホス中央部に居住する狩猟民族、



写真 14 2008 年 2 月モホス大氾濫

シリオノ族の宗教世界には、アインゲ、アバッチュクワイヤ、エツィロケ、クルックワという四つの精霊（スピリット）が存在する。このうちアインゲは人間の守護霊であるが、肉体の死と共に去る。残りの三つは人間にとって好ましくないスピリットで、人々はその存在を恐れている。中でも、クルックワ³¹⁾が最強で、時として人間に危害を加えることもある。これらは自然そのものの象徴ではないだろうか。そこに人々の自然に対する畏怖の念が現れてはいないだろうか。そして、かつて大平原に大規模な水利システムを建造して巨大社会を構築したモホス古代人もまた、本質的には、同様の自然観、環境思想を持っていたと考えられるのである。

15. おわりに

以上のページにおいて、ボリビア・アマゾン、モホス大平原の古代居住地の発掘調査の結果を、その世界観と宗教文化に重点を置いて論じてきた。これらの考察からロマ・チョコラタリト古代社会について何が判明したのか。モホス大平原中央部の古代において長期間にわたり高度な文化を持つ社会が存在したということである。この古代社会は紀元前に始まったと思われるが、本格的な発展を遂げるのは西暦 600 年を過ぎたあたりからである。ロマ・チョコラタリト社会は二度の繁栄期を経て、最終的に 1300 年代半ば頃終息した。この古代社会は非常に優れた土器文化を持っていた。古代人は社会生活に必要な土器を大量に製作し、また土器作品によって芸術的、宗教的表現を試みた。古代社会の宗教文化に関して言えば、古代人は死者の埋葬において独特な複葬を実施した。また宗教祭儀においては音楽が使われたと思われる。古代人の世界観には顕著な二元論的傾向があったが、これは中南米の他の古代文化、先住民族文化に共通することである。古代人の宗教は一種のシャーマニズムであったと考えられるが、スピリットと死者の世界を信じ、

そうした世界と交信する司祭、シャーマンが存在した。最後に、モホスの古代人はまたアマゾンの自然と共生するための民族の知恵、環境思想を持っていた。それは、明言すれば、一種の循環の思想、「土の文化」の世界観であったと思われる。

注

- 1) アマゾンには高度な文化は存在しないという考えは、アメリカ人類学者、ロバート・ローウイ、ジュリアン・スチュワード、またその弟子のペティ・メガーズによって 1950 年代に確立されたものである。いわゆる環境決定論であるが、その背後には当時の西欧中心的世界観、パラダイムが存在した。しかし進歩的なアメリカ人考古学者、ドナルド・ラスラップはこの考えを否定し、逆にアマゾンこそがアメリカ大陸の古代文化の起源であると唱えた。その後のアマゾン考古学の発展はラスラップの仮説を裏付けるもので、アマゾンの古代において大規模で高度な文化が存在したことを明らかにしていった。
- 2) Erland Nordenskiöld (1877-1932) はスウェーデン民族学者である。生涯の大半を南米大陸の先住民族文化の研究に捧げ、代表作としてアマゾン先住民族の文化・宗教を扱った膨大な論考、『比較民族学研究』がある。
- 3) *The Aboriginal Cultural Geography of the Llanos de Mojos of Bolivia* (Denevan, 1966). William W. Denevan (1936-) はアメリカ人文化地理学者である。
- 4) Dougherty y Calandra (1981) その他を参照されたい。ドヘルティとカランドラはアルゼンチン、ラプラタ国立大学の考古学者である。
- 5) ボリビア国立考古学研究所は通常 UNAR と呼ばれる。ボリビアにおける埋蔵文化財の保護、考古学関連の調査プロジェクトの認可、実施等を行う国家機関である。
- 6) 考古学者 Donald W. Lathrap (1927-1990) が提唱したコンセプトである。それによれば、アマゾン古代人は原始林の中から人間に有用な植物を選んで居住地の周りに植え、アマゾンの自然を半人工化したという。日本の里山に類似したものである。「家の庭」は現在の先住民族の間ではあまりよく保存されてはいないようである。
- 7) 定期的に氾濫を繰り返すモホス大平原には肺魚及びその仲間である、ブチャーレ、ベントン、アイルー、バグレなどが生息している。これらの魚は肺とエラの両方を持っている。雨期が過ぎて乾期になり、湿地に取り残された場合でも、土中に潜り、肺呼吸によって次の雨期が到来するまでの期間を生き延びることができる。
- 8) Caracol. 英語では apple snail と呼ばれる。カラコルは一見すると日本のタニシに似ているが、リンゴガイ科に属し、種としては異なる。ロマから大量に発見され、古代においては食用にされたと思われるが、現在のモホスでは食用にはされていない。
- 9) 出土した古代の笛（ピーファノ）はそのよい例である。詳細は「動物信仰」の項を参照されたい。
- 10) 「埋葬」の項を参照されたい。
- 11) モホス大平原先住民族の言語構成は極めて複雑である。大別すると、アラワク語族、トゥピ・グアラニ語族、タカナ語族、パノア語族に分かれる。また孤立言語も存在する。この中でモホ語、パウレ語がアラワク語族、またシリオノ語、グアラヨ語がトゥピ・グアラニ語族に属する。
- 12) Unit 7 は 2.5mx2.5m の小さなユニットで、設けられた発掘ユニットの中では最も低い位置に

ある。ここから何体かの人骨が出土したが、最深部 2.5m のさらに下に大型の甕棺群の存在が発見された。時間的制約のため発掘作業を継続することはできなかったが、これはロマ・チョコラタリトの歴史年代が予想以上に古い可能性を暗示するものである。

- 13) モホス古代社会の居住地ロマは構造的に二つの部分から成り立っているとされる。基底部（プラットフォーム）と上部構造物である。基底部は 1～2m の低い台地であり、非常に古い時代に造られたと思われる。対照的に上部構造物は比較的新しく、その最後にピラミッド状構造物が徐々に形成されていったと考えられる。
- 14) 第一の繁栄期後の、動物の骨、あるいはカラコルの急激な減少はモホスの自然環境、生態環境の悪化を暗示して可能性もある。もしそうであるとすれば、この環境破壊をもたらしたものは、急速な人口の増加に端を発する動物の乱獲、あるいは森の減少であったのかもしれない。
- 15) ティワナクの世界観については「歴史」、「宗教」等の項を参照されたい。パチャについては「宗教」の項、注 30 を参照のこと。
- 16) モホス古代社会の終焉をもたらしたものが何であったのかははっきりとは解明されていない。ただ興味深いことに、近隣地域であるアンデス高地のティワナク社会もまたほぼ同時期（1289 年）に崩壊している。その最大の原因は気候変動による長期間の旱魃、そして致命的な飢饉であった。ティワナクはモホス大平原を流れるベニ川の上流地域にあたり、したがってその時モホスにおいても何か重大な異変が起きた可能性はあると思われる。
- 17) 葬送の習慣に関して言えば、アラワク語族文化に一般的に見られるのは甕棺葬である。対照的にトゥピ・グアラニ語族の文化では土葬が主流である。その意味ではロマ・チョコラタリト古代社会において両者の伝統が共存したというのは無理な類推ではないと考える。
- 18) ピーフアノ（Pifano）は長さ約 30cm、直径が最大で 2cm の縦笛である。バトの翌骨で出来ている。バトはモホスに生息する巨大なコウノトリで体高は 1.5m 以上に及ぶ。現在も使われているピーフアノは六つの穴を持っている。
- 19) 鳥は世界中の先住民族文化、古代文化において聖化された動物であった。たとえば、アマゾン北部の熱帯雨林に住むヤノマミ族の最高神オマーマは太陽神であるが、鷲はその化身とされる。またアンデス古代文化においてコンドルは能力を象徴する聖鳥であった。鳥は他地域の文化においても神聖視され、たとえば中国の長江文化においては、カラスは太陽の使者であると見なされていた。
- 20) マチェテロの頭飾りは実は伝統文化とキリスト教とのシンクレティズムでもある。よく見ると羽の先には別な白い羽が付いていて、これはキリスト教の燃えるローソクの象徴であるという。マチェテロの衣装は通常はマチェテロの神殿に保管されているが、祭りが始まると、盛装したマチェテロは中央広場のカトリック教会に移動し、そこから町中を踊りながら行進する。
- 21) 現代モホス文化においてアナコンダは必ずしもよい存在であるとはみられていない。この大蛇は別名をクリチと言うが、風（ハリケーン）と共に人間にとって危険な存在でもある。しかし同時にまた、「人造湖の水が枯れクリチが死んだ時、モホス古代文化は消滅した」という暗示的な伝説も残されている。
- 22) チャビン・デ・ワンタール文化においては独特のジャガー信仰が存在した。幻覚植物サン・ペドロの影響下に古代のシャーマン（ヤン・クンタ）はジャガーに変身し宗教祭儀を行ったが、ジャガー人頭はその変身の過程を表した半人半獣の石頭である。
- 23) 詳細は Métraux（1943）を参照されたい。

- 24) ボリビア・アマゾンとアンデスの中間に位置するユングス地域における発掘調査では、最上層に植民地時代の土器、その下にインカ時代、ティワナク時代の土器と続き、最下層にアマゾンの土器が発見されている。アマゾンの土器の起源が非常に古いことを示すものである。
- 25) クラーク・エリクソンのように、対になったロマの存在を古代における半族社会（Moiet Society）の存在と考える研究者もいる。またホセップ・バルバは対になった人造湖を、一つが魚の養殖のための主湖、またもう一つがその餌となるタロペ（ホテアオイ）の繁殖のための副湖であると考えた。
- 26) Paco. Mistico とも言う。クスコ地域で活動する4種類のシャーマンの一つ。祈祷、神託、予言等を行う。
- 27) Apú. ペルー・アンデスの聖山に住む山の神である。ボリビアではアチャチーラ（Achachila）と呼ばれる。
- 28) Chaumeil（2007）を参照されたい。
- 29) Cortés Rodríguez（2005）を参照のこと。
- 30) Pacha. パチャはアイマラ語、ケチュア語両方に共通するアンデス文化の宇宙論的概念である。世界、宇宙、時間、歴史等を意味する。Alax Pacha、Aka Pacha、Manca Pacha にはそれぞれの世界のジャガー、蛇が住む。これら三つのパチャはティワナク人が太陽、大地、水を世界で最も重要な要素とみなしていたことを意味する。
- 31) クルックワはかつて日本にも存在した「鬼」のような怪物である。この怪物は目で見ることが出来、実際に人間をさらってゆくことがあるという。シリオノ族はその存在を恐れているが、同時にまた強い力を持つ超自然的存在として畏敬の念を持っているようにも思われる。詳細は Califano（1999）を参照されたい。

参考文献

- Barba, J., et al. (2003). *Moxos: Una limnocultura: Cultura y medio natural en la amazonia boliviana*. Barcelona: Centre d'Estudis Amazònics (CEAM).
- Califano, Mario (coordinador) (1999). *Los indios Sirionó de Bolivia oriental*. Buenos Aires: Ciudad Argentina.
- Chaumeil, J.-P. (2007). Bones, flutes, and the dead: Memory and funerary treatments in Amazonia. In Carlos Fausto and Michael Heckenberger (Eds.), *Time and memory in indigenous Amazonia: Anthropological perspectives*, pp.243-283. Gainesville, Florida: University Press of Florida.
- Chávez Suárez, J. (1986). *Historia de Moxos*. Segunda edición. La Paz, Bolivia: Editorial Don Bosco.
- Cortés Rodríguez, J. (2005). *Caciques y hechiceros: Huellas en la historia de Mojos*. La Paz, Bolivia: Plural Editors/Universidad de la Cordillera.
- Denevan, W. M. (1966). *The aboriginal cultural geography of the Llanos de Mojos of Bolivia*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Denevan, W. M. (1992). The pristine myth: The landscape of the Americas in 1492. *Annals of the Association of American Geographers*, 82, 369-85.
- Denevan, W. M. (2001). *Cultivated landscapes of native Amazonia and the Andes*. New York:

Oxford University Press.

- Dougherty, B. y Calandra, H. A. (1981). Nota preliminar sobre investigaciones arqueológicas en los Llanos de Moxos, Departamento del Beni, Republica de Bolivia. *Revista del Museo de La Plata, Sección Antropología*, 8 (53), 87-106. Republica Argentina: Universidad Nacional de La Plata.
- Dougherty, B. y Calandra, H. A. (1981-1982). Excavaciones arqueológicas en la Loma Alta de Casarabe, Llanos de Moxos, Departamento del Beni, Bolivia. Con la colaboración de Juan Faldín Arancibia. *Relaciones de la Sociedad Argentina de Antropología*, 14 (2), 9-48.
- Dougherty, B. y Calandra, H. A. (1984-1985). Ambiente Y arqueología en el oriente boliviano: La provincia Iténez del departamento Beni. *Relaciones de la Sociedad Argentina de Antropología*, 16, 37-61.
- Eder, F. J. (1888). *Descripción de la sociedad en el reino del Perú*. Traducción de la edición de 1791. Traducida del latín por el P. Fr.Nicolás Armentia. La Paz, Bolivia.
- Eder, F. J. (ca.1772/1985). *Breve descripción de las reducciones de Mojos*. Traducción del manuscrito de la Biblioteca Universidad de Budapest de 1772. Traducción y edición de Josep M. Barnadas. Cochabamba, Bolivia: Historia Boliviana.
- Erickson, C. L. (1980). Sistemas agrícolas prehispánicos en los Llanos de Mojos. *América Indígena*, 40 (4), 731-755.
- Erickson, C. L. (1994). Archaeological perspectives on ancient landscapes of the Llanos de Mojos in the Bolivian Amazon. In P. Stahl (Ed.), *Archaeology in the American tropics: Current analytical methods and applications* (pp.66-95). Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- Erickson, C. L. (2000). Lomas de ocupación en los Llanos de Mojos. In A. Durán Coirolo and R. Bracco Boksar (Eds.), *La arqueología de las tierras bajas* (pp.207-226). Montevideo, Uruguay: Comisión Nacional de Arqueología, Ministerio de Educación y Cultura.
- Erickson, C. L. (2000). Los caminos prehispánicos de la amazonia boliviana. In L. Herra and M. Cardale de Shrimpff (Eds.), *Caminos precolombianos: Las vías, los ingenieros y los viajeros* (pp.15-42). Bogota, Colombia: Instituto Colombiano de Antropología Historia.
- Fausto, C. (2002). The bones affair: Indigenous knowledge practices in contact situations seen from an Amazonian case. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 8 (4), 669-690.
- Fausto, C. (2007). If the god were a jaguar: Cannibalism and Christianity among the Guarani (16th-20th centuries). In C. Fausto and M. Heckenberger (Eds.), *Time and memory in indigenous Amazonia: Anthropological perspectives* (pp.74-105). Gainesville, Florida: University Press of Florida.
- Gabriel Castillo, F. (2001). *La amazonía boliviana indígena: Estudio ethnohistórico de la economía, la sociedad y la civilización de los pueblos de las selvas bolivianas*. La Paz, Bolivia: Colegio Nacional de Historiadores de Bolivia, Producciones CIMA Editores.
- Heckenberger, M. J. (2005). *The ecology of power: Culture, place, and personhood in the southern Amazon, A.D.1000-2000*. New York and London: Routledge.
- Hermosa Virreira, W. (1950). *Los pueblos guarayos*. Prólogo por Ñuflo Chávez Ortíz. La Paz, Bolivia.

- Lathrap, D. W. (1970). *The upper Amazon*. New York/Washington: Praeger Publishers.
- Lema, A. M. (comp.) (1998). *Pueblos indígenas de la amazonía boliviana*. La Paz, Bolivia: AIP FIDA-CAF.
- Lentz, D. L. (Ed.). (2000). *Imperfect balance: Landscape transformations in the precolombian Americas*. New York: Colombia University Press.
- McEwan, C., Barreto, C. & Neves, E. (Eds.). (2001). *Unknown Amazon: Culture in nature in ancient Brazil*. London: The British Museum Press.
- Meggers, B. J. (1971). *Amazonia: Man and culture in a counterfeit paradise*. Chicago and New York: Aldine/Atherton.
- Métraux, A. (1943). The social organization and religion of the Mojo and Manasi. *Primitive Man, Quarterly Bulletin of the Catholic Anthropological Conference*, 16 (1-2), 1-30.
- Nordenskiöld, E. (1913). *Urnengräber und mounds im bolivianischen flachland*. Leipzig y Berlin: Baessler Archiv. 3, pp.205-255.
- Nordenskiöld, E. (2002). *La vida de los indios: El Gran Chaco (Sudamérica)*. Traducido del alemán por Gudrun Birk y Angel E.García. La Paz, Bolivia: APCOB.
- Nordenskiöld, E. (2003). *Indios y blancos en el nordeste de Bolivia*. Traducido del alemán por Gudrun Birk y Angel E.García. La Paz, Bolivia: APCOB.
- Pärssinen, M. & Siiräininen, A. (2003). *Andes orientales y amazonía occidental: Ensayos entre la historia y la arqueología de Bolivia, Brasil y Perú*. La Paz, Bolivia: Producciones CIMA.
- Pinto Mosqueira, G. (2002). *La cultura de los Mojo del Beni-Bolivia: Fines del siglo XVII y primera mitad del siglo XVIII*. Cochabamba, Bolivia.
- Pinto Parada, R. (2001). *Pueblo de leyenda*. La Paz, Bolivia: CAF.
- Pouilly, M., Beck, S. G., Moraes, R. M. y Ibañez C. (editores). (2004). *Diversidad biológica en la llanura de inundación del río Mamoré: Importancia ecológica de la dinámica fluvial*. Santa Cruz de la Sierra, Bolivia: Fundación Simón I. Patiño.
- Prümers, H., James B., C. y Plaza M., R. (2006). Algunas tumbas prehispánicas de Bella Vista, Prov. Iténez, Bolivia. *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen*, 1, 251-284.
- Reinhard, J. (1991). Tiwanaku: Ensayo sobre su cosmovisión. *Pumapunku, Revista oficial del Centro de Investigaciones Antropológicas Tiwanaku*, año1 (2), (nueva época, diciembre, 1991), 8-66.
- Rivero Parada, L. (2005). *Viuri samuré: Folklore mojeño*. San Ignacio de Mojos. Trinidad, Beni, Bolivia: Comisión de Pastoral Indígena del Vicariato Apostólico del Beni.
- Roosevelt, A. C. (1991). *Moundbuilders of the Amazon: Geophysical archaeology on Marajo Island, Brazil*. San Diego, California: Academic Press.
- 実松克義 (2010) 『アマゾン文明の研究—古代人はいかにして自然との共生をなし遂げたのか』現代書館

